



忘れたい

その子は、大人しい子だった。

いつも1人で行動して、時間がくるとそそくさと帰ってしまう。

でも僕は、そんな彼女に恋をした。

いつの間にかだった。話したことも無ければ、目を合わせたことすら無かった。

なのになぜか好きになっていて、気付いたら目で追う日々を過ごしていた。

「なあ、だれか好きなやついたりしねえの？」

ある日の放課後、ひよんな事からそんな話題が生まれた。

「なに？そういうお前はいんのかよw」

「いねえよ！たださあ～、もしそんなやつがいて、そいつが片思いならさ、なんか協力してやろうかと思ってさ。」

僕は一瞬ギクリとして、そいつの顔を見た。

「……怪しいな。お前なんか企んでるだろ。」

「実は……ちょっと。」

そう言いながら小首を傾げ、何故か目元でピースをしてウインクした。

その瞬間、もう1人が持っていたiPhoneで小突いた。

「意味分かんねえ、なんなんだよ。」

小突かれた部分を抑えながら、大袈裟に呻く。

「うああ…いや、ちょっとからかおうかなって思っただけだよ…。」

ずっと大袈裟に呻いていたそいつを、もう一度小突く。

「もう黙ってろ、クソ。」

僕等は大笑いした。でも良かった、バレたのかと思った。正直人が人なので言うのに躊躇う。

こいつらではなく、彼女の方だ。

馬鹿にされたらたまったもんじゃない。

「……じゃあ、今からどっかで暇潰して、飯食いに行こうぜ。」

「よっしゃ、お前の奢りな！」

「はあ?!だれがお前みたいなやつに奢るんだよ!死んでもしねえ!」

そんな事を駄弁りながら、いつものように靴を履き替える。

すると、珍しく遅めに彼女が靴箱にやって来た。今日はやけにのそのそしてるなとか思いながらも、少しドキドキする。いつも下を向いているので分かりにくいだが、風で舞った時に揺れる髪から見えるその顔は、とてつもなく綺麗だ。

でも、今日は違った。

ふわっと風が髪を揺らした先に見えたその頬には、涙が伝っていた。

……泣いてる？

思わず立ち尽くす僕に、仲間が声を掛ける。

「何してんの?置いてっちゃうぞ、泣くなよ!？」

「馬鹿言うな、泣かねえよ！」

そう言って小走りした僕の横を、彼女が追い越して行った。後ろから見ても分かるように、涙を拭いながら。

なんだか胸が苦しくなって、思わず追いかけた。

「えっ、おい、どこ行くんだよ！待てよ！」

仲間が僕に叫んでいたが、無視して追いかけた。

何か言ってからのの方が良かったかなとも思ったが、やっぱりそれどころではなかった。

彼女が泣いている。

もしかしたら、僕にも何か出来るかもしれない。

何か辛い事があるのなら、助けてあげたい。

そう思った。

一つ先の角を曲がって、大通りに出る。そこを真っ直ぐ行った信号が赤に変わった。

追い付ける！

そう思った瞬間だった。

僕の右手に、物凄いスピードで逆走してくる車が見えた。

爆音を鳴らしておかしい角度で道路を滑るスポーツカー。

避けられなかった。

目の前がブレる。身体に物凄い衝撃が加わり、気持ち悪いほど体が振れる。

そのまま吹っ飛ばされ、歩道に植えられた木にぶつかる。

そしてそのまま、僕にスポーツカーが突っ込んで来た。

意識が鈍る。

もう訳が分からなかった。

今何が起きたんだ？内臓が全部上に上がってきた気がして、抑えきれられないモノを吐き出した

。

それでも僕は、見にくい目を凝らして彼女を探した。

彼女は、驚き腰を抜かした状態で、僕を見ていた。

僕の方に手を伸ばし、必死に何かを言っていた。

よく聞こえない。

その時、呼吸が薄れる僕は、夢を見たのかもしれない。

彼女の背後から、暴走する1台の大型トラック...

一瞬だけ、何もかもが元に戻った。

「危ない！」

...ように感じただけかもしれない。でも、僕は確実にそう叫んだ。

彼女が泣きながら驚く。僕は必死に後ろを指す。

彼女の元へ何とかして駆け寄ろうとした。

だが……無理だった。

大型トラックのデカイタイヤが、彼女を一瞬で巻き込んだ。

耳が痛くなる音が辺りに響く。

見たことのない量の血が飛び散り、跡を引く。

どんどん千切れていく彼女の体。

大型トラックは、そのままカーブし、僕に激突した。

僕の目の前を、彼女の顔が飛んでいた。

大好きだった綺麗な顔。その顔は、もはや血塗れでよく分からなかった。

涙が頬を伝う。

その間、僅か0.00何秒とかならう。

僕は激突された瞬間、意識を失った。

即死だった。

その子は、大人しい子だった。

いつも1人で行動して、時間がくるとそそくさと帰ってしまう。

でも僕は、そんな彼女に恋をした。

いつの間にかだった。話したことも無ければ、目を合わせたことすら無かった。

なのになぜか好きになっていて、気付いたら目で追う日々を過ごしていた。

——それは今も変わらない。

ただ、一つ変わったことがある。

言葉を交わすことはないが、今ではずっと一緒だった。

僕たちは歩道に植えられた木の側で、同じ時を過ごせるようになった。

もう大丈夫、キミが悲しい時も、辛い時も、ずっとそばにいるよ。

涙は僕が拭いてあげる。だからね、泣かないで？

大好きだよ

綺麗な青い空。

聞き慣れた仲間の声が、今日もまた、僕らの真上から聞こえるのだった。

「ほんとお前はバカなやつだ……。」